

## 今治市長物語②

# 村上紋四郎

阿部克行

元衆議院議員今治市長村上紋四郎翁銅像銘

村上紋四郎翁は、慶応元年八月越智郡宮窪村に生まれ幼にして俊敏早くも後年大成の萌しがあつたという。明治二十三年地方自治制の施行せられるや二十五歳にして推されて宮窪村長となり同二十五年には県会議員に当選し爾来その職に在ること実に三十年、その間議長の栄職にも就いた。

次いで大正十三年には衆議院議員に当選し、回を重ねること五度その間現職のまま今治市長に選ばれる事二回よく多大の業績をあげた。

特に港湾修築による巨額の高利債を低利債に借替え又昭和十一年には国光紡績今治工場の誘致に成功し今治綿業界の興隆に寄与した。又今治市内の井戸水の多くが飲料に不適当な事を憂慮し、上水道の敷設に着手し昭和十一年三月これを完成し市民に多大の慶福を齎した。又明治二十三年宮窪村漁業者総代となり其後越智野間漁業組合頭取に選ばれるや広島県との漁場紛争を解決し、豊饒な燧灘漁場を獲得して東豫漁民の生活を安定せしめた等本県水産業界に多大の貢献をした。翁が多年国政並に地方自治、地方産業に貢献した功績は極めて顕著なものがあつたが、晩年益々その名声を高らしめたが大東亜戦争の熾烈を極めた昭和二十年一月遂に病を得て八十年の輝く生涯を終えた。今治市に於いては燧灘漁業組合連合会と相議つて上水道貯水池に翁の銅像を建立しその功績の一端を誌して頌徳の記念とした。

昭和三十六年五月

元衆議院議員燧灘漁業組合連合会会長馬越晃撰文  
日展審査委員堀進二造像  
織田源九四郎書



今治の初代市長・片野淑人（ひのしよく）の銅像が市の公会堂前に建てられてあることは、市民の多くは知っていると思うが、第四代市長・村上紋四郎と第十五代市長・羽藤栄市の銅像が市内某所に建てられてあるのを知っている市民は少ないのではないかと思う。

逆の言い方をすれば、銅像になっている歴代市長は、その三名だとも言える。（ただし、村瀬武男は、大西町長としての銅像は建立されている）

銅像が建っているから、その三名の市長の業績は抜きん出て顕著である——とは断定できぬが、やはり他の市長より功労の度が高いことは認めなくてはならないだろう。

ただし、その銅像が建てられている場所に問題がありはしないか？と思うのである。

片野市長の場合は、まずもって申し分のない場所であるとして、村上市長と羽藤市長についてはその設置場所に筆者ならずとも首をかしげたくなるはずである。

村上市長像は、市内山方町、海禅寺山の配水池前に置かれ、羽藤市長像は、彼の生誕地である桜井登畑（のやま）の三島神社境内にある。

そのどちらの場所も、市民が気軽に足を運ぶ地域ではなく、人の目に明らかに留まる場所でもない。

筆者が取材した限りにおいては、両市長とも銅像の設置場所を決めるに際して、関係者間で侃々諤々（かんかんげつげつ）の議論がなされたようだが、その結果は、どちらも市民を納得させる程の理由にはなっておらず、残念なことだが、政争の具に供された感が強い。

市長が在職中においては、堂々、お互いの所信を明らかにして、政敵として争う事に対しては何ら問題はなく、むしろ筆者はそれを

勤める立場だが、その印綬（いんじゆ）を解いた後まで政敵としての怨念を残すことには賛成できない。

ましてや本人が死したる後のこととなれば心を広くして、その功績を認めることに対して吝かであつてはならないと思う。

市長の銅像と言えば、市民の最も誇りとするものの一つであり、市のシンボルの存在でもある。それを思うと、もう少し市民が日々ふり仰ぎ、敬愛の念をよび起こすような場所に両市長の銅像を移し変えることは出来ぬものだろうか？人の影さえまったく見ることの出来ない森閑とした場所にある村上・羽藤両市長の銅像の前に佇む時、その事を強く感じるのである。

栄えある、この今治市の第四代（二人目）市長村上紋四郎の評伝を今回書くに際して、まずもってそのことを言っておかねばならない。

「村紋」こと村上紋四郎。いい意味でも悪い意味でも、彼こそ歴代今治市長の中では最も政治家らしい政治家だった。

事実、その政治経歴も多彩であり華やかであつた。

明治二十二年宮窪村漁業組合頭取を皮切りに、宮窪村長、県議會議員、同議長、衆議院



村上紋四郎

議員、今治市長と、政治の世界を奔馬の如く駆け抜けて行った天性の政治家であつた。

政治手腕の練達さや選挙技術の巧みさは超弩級で、その豪放磊落な人柄と相まって人々を魅了し、熱烈な信奉者を生んだ。不選挙民に対する接し方も、「今太閤」ともてはやされ若くして総理大臣の地位についた田中角栄の手法を彷彿とさせるものを持っていた。

彼が住んでいた青木通りの屋敷に、彼を訪れた者に対しては、どんなに多忙なときであつても必ず自らが直接会い、

「選挙でお世話になる方は、親や子よりも大分可愛い。さあ上がりたまえ」と言い、客を座敷に招き入れ酒肴をふるまつたという。

また、選挙戦においても、彼の人心収攬術は卓抜していた。選挙期間中に選挙民に頭を下げて票を依頼するのは当然のこととしても、彼の場合は選挙の結果が勝ちであろうと負けであろうと、必ず支持を頼んだ人の家に

は自らが顔を出し「お世話になりました」と、深々と頭を下げた。

なかなか並の政治家には出来ぬ事で、政治の機微を知りつくした「人間通政治家」だつたといえよう。

その種代の人間通政治家・村上紋四郎を生んだのは、「水軍の里」伊予大島・宮窪である。筆者は、初夏の陽差しが燦々と降りそそぐ五月初旬のある日、今治港からフェリーボートにクルマと共に乗り、村上紋四郎の故里に向かつたのである。大島は、

「厩太き海賊顔の人ありて能島の夏を忘れかねつも」

と歌人・吉井勇が詠んだ風光明媚な島である。

下田水港から宮窪町までは、広くきれいな道路が島の中央部を縦断している。道路だけは新しく、自然は手を加えられておらず昔のままの景観を残している。

さくらんぼの木が路上に勢り出して、薄桃色の実を下げている。採る人としてないか、風にやさしく揺れていた。

かの昔、瀬戸内海を手中に収めた村上水軍の根拠地であった能島を眼前にのぞむ宮窪の浜。その浜の海岸縁に建つ居宅で、紋四郎は慶応元年の八日に呱呱の産ぶ声をあげたのである。

父親・伊勢治、母親・リセの間に生まれた初めての子供であった。その後、二人の妹が生まれているのであるが、戸籍にはそれが記載されておらず、従って名前は判明しない。長子でありながら、何故「紋四郎」という名前が付けられたのか、今となっては誰にも分からない。

もともと、村上家の祖先は吉海の出入り、紋四郎の父が祖父の代に、この宮窪に働きに出て、当時庄屋の家柄で、村一番の素封家だった徳丸家に身を寄せた。

徳丸家の当主は、その若者に尋常ならざる才覚を見出し、自分の愛娘と娶わせ分家させた。これがこの地における村上家のルーツである。

庄屋・徳丸家と姻戚関係になったことが、その後の村上家を隔の当たる存在にした。

紋四郎は天性の人間好きな性格と、卓越した人心収獲術を武器に、メキメキと頭角を現し、その地歩を築いて行った。

若くして漁業組合の頭取（現・理事長）におされ、よくその職をこなして実力をつけ、明治二十三年五月、弱冠二十六歳という若さで宮窪村初代村長に選出された。爾来三十年間にわたって村長の職に精励した。

明治二十五年には、村長に在職のまま県会議員に推され両職を兼務した。まさに駿馬、野を駆けるが如き榮進ぶりである。

筆者の運転するクルマは宮窪町に入った。間もなくすると、左右が切り通しになってい

る道路に出た。その切り通しの右側部分の丘陵が、村上一族が眠っている墓地だと聞いてきた。道路横にクルマを止め、手前の方向から急傾斜の切り通しを上がって行くと、目の前に墓碑が現われた。

おそらく墓碑数は二百基は充分数えられると思う。墓地に向かって右側隅に古ぼけた小さなお堂があり、その前に不吊り合いに建っている巨石の表面には『三島水軍総師・村上家の菩提寺跡』と、麗々しく文字が刻まれてあった。その巨石を庇うかのように一本の桜の木が植えられてあり、青々と茂った若葉の緑が初夏の陽に映えてキラキラと輝き、小さな葉音を立てて風にそよいでいた。

林立する墓石の殆どの碑名は、徳丸家と村上家の名前が刻まれている。

詳細はあとに触れるが、宮窪随一、いな、日本でも有数の政治系譜を誇る村上家の墓地だけに、その墓碑は一目瞭然、すぐに目にとま



る場所にあるものと多寡をくくって来ただけに、その場所がすぐに目につかず、一瞬「場所を聞き違えたか？」とさえ思った。

そんなはずはない、と思い直し、今度は余り目立たぬ場所に建っている墓に焦点をしばらく、一基一基、丁寧に碑名を読みながら探して廻った。

盛夏を思わせるような暑い陽差しが頭上から照りつけ、肌が焼けるかのように熱い。カメラを持つ手は、じつとりと汗がにじんでい

る。

そのうちやっと、墓域中央部右寄り付近で、「村上文四郎夫婦墓」と刻まれ、ひっそりと建っている墓を見つけ出した。

高さ一メートルほどの方柱型の簡素な碑で、これが地域で有名を嗣せた政治家の墓かと、一瞬自分の目を疑った。

周囲に林立する豪華な墓碑群の中で、それは余りにも粗末で格式の乏しい墓石であった。単に申し分けのために建てられた、といった感じの、建立者の心がま

った感じの、建立者の心がま  
たくこもっていない墓標だった。  
おまけにそれは夫婦墓である。

筆者はしばらくその場に呆然と  
佇み、吹きぬける風の音を聞いて  
いた。

その後、墓標の側面に廻って墓  
誌を読むと、昭和二十年一月二十  
一日没、享年八十一歳と刻まれて

いた。そして、妻の名はイト、享年二十七歳と記されてあった。

前にまわって見ると、村上家の墓碑は正面に三基並べて据えられており、向かって右が紋四郎、中央が孫に当たる信二郎、左側が父親、伊勢治になっている。大きさから言えば、父・伊勢治の墓が一番大きく、次いで信二郎、一番小さいのが紋四郎である。

筆者も過去において取材の必要から、多くの著名人の墓に参らせてもらう機会があったが、生前の威勢に比較してこれほど落差のある墓にお目にかかったのは初めての経験である。

名家・名門と言われる家柄の大地主や豪商の墓の立派な造りを多く見て来ただけに信じられぬ思いであった。

筆者は「井戸堀政治家」という言葉を思い出した。戦前の政治家というのは、どちらかと言えば名誉職的要素が強く、政治活動に

よって財を蓄えるという思想はなかった。従って選挙のたびに田地畑、屋敷が無くなり、最後に残るのは買ひ手のつかない、井戸と塀だけだという意味である。

村上紋四郎の墓前に佇むとき、まさしく彼こそ「井戸堀政治家」の典型だったことを確信した。そして、政治というものが持っている表面の華やかな世界とは裏腹に、庶民たちの彼ら政治家に対する死後の評価の存外の冷たさに慄然とした。

（一人のために尽くすとは、一体何なのだろう？）

政治家に対する毀譽褒貶のシビアさを目の前に見せつけられ、筆者は自問自答せずにはおれなかったのである。

### 3

今治の初代市長・片野淑人は三期十二年を務めて、昭和七年十一月任期満了と共に退陣した。

その後任に、民政党の推す代議士・村上紋四郎と、政友会（時の与党）の推す、元大阪市助役・池上鹿之助とが競った。そして最後には、市会議員の投票によって雌雄が決せられ、結果としては両者共々が同数の十五票づつを得、最終的に年長者である村上紋四郎が、四代目（二人目）の今治市長に選任されたのである。

彼はその時、衆議院議員の席を占めていたのであるが、当時は議員で市長に選任されることは決して珍しいことではなく法的に許されていた。

しかし、市長が衆議院に立候補することは認められていなかったため、村上市長は、総選挙の時は一度市長を辞任して、当選後再び市長に選任されることもあった。

戦後の選挙制度からすれば、考えられぬ制度である。

村上紋四郎は希にみる雄弁家で、その意味

からすれば、彼こそ、まさに政治家になるために生まれて来たような人物だった。

総選挙の時など、理路整然と、滔々として政府批判する彼の演説に会場は熱気を帯び、いつも超満員の盛況だった。

ある選挙演説会場でのこと。紋四郎が舌鋒鋭く、得意の政府批判の演説を始めると、会場に検閲官として着座していた警官が、突如サーベルをガチャつかせて立ち上がり、「注意！」と右手で指差し叫んだ。

その声を聞くなり紋四郎は壇上からツカツカと下り、その検閲官の前に立つなり、

「この村上紋四郎、政界に出て四十年。注意」と言われたことは今だかつて一度も無い！」と昂然と言いつち、壇上に引き上げて行った。

満場の大喝采を浴びたことは言うまでもない。政治家としての揺るぎない自信と、大衆を受けするパフォーマンスを充分心得ていた政

治家、村上紋四郎の面目躍如たる光景である。

もう一つ逸話を紹介する。

旧制・越智中学校(現・今治南高校)は、大阪島の煙害賠償金で設立された学校だが、その落成式(大正十五年十一月十日)当日は、県知事はじめ、多く高位顯官が臨席した。

民政党代議士・村上紋四郎も賠償金交渉において重要な役割を果たした功績で、来賓の一人として招待され、祝辞を述べる立場だった。

君が代の合唱に続き、工事事務の報告、組合長の式辞、県知事の告辞などが長々と続き、そのため会場の空気は弛緩し、睡魔に襲われる者さえ居たのだが、いざ村上紋四郎が登場し、彼が持ちまへの弁舌で祝辞を述べはじめると、場内の空気は一変し、その齟齬にして、流暢な弁舌に、参加者は惹き入れられ、身じろぎもせず聴き入ったという。

その時の名祝辞は、それからしばらくは語り草になったともいう。

閑話休題……

民政党と政友会の勢力が互角で出発した村上市政は、当初から波乱含みで議会では政友会と激しく対立した。

光藤忠太郎・市議会議長を首領とする政友会とは、常に政策面において衝突し、甲論乙駁をくり返した。

市長と市会との抗争が表面化するにつれ、市民の市政に対する関心は否が応にも高まった。

当時、市会の本会議場は公会堂階下、第一会議室だったが、それでは傍聴者を収容しきれなくなり、ついに議場を二階の大広間に移し、なお立錫の余地がなかったほどの盛況を呈したのである。

また、市長と議長が別々に議会を招集し、市会が公会堂の階上と階下で同時に行われる

という、前代未聞の珍事さえ生じた。

当時の市会は年二回、予算・決算時に開かれ、他のこまごまとしたことは、参事会で決定していた。

何といつても村上市長の最大の功績は、上水道の敷設を完成させたことであろう。

上水道計画は、大正十一年以来、各種調査を進めていたが、昭和七年初め、広島在住の水道界の權威・沢井工学博士に調査を依頼し、善社川伏流水を主水とする経済的な水道布設の可能性が確認された。

この沢井博士の「水道布設目録見書」を基に、同年五月市会で水道布設に関する諸議案が可決した。

本市域の地下水は、大部分が飲料水に適さず上水道の敷設は市制施行当初から、市民の強い要請だった。

前市長も、港湾に続いて着工する予定だったが、それを実施に踏み切り、完成させたの

は村上市長であった。

上水道工事は、総額六〇万円の事業規模であった。(当時の市長の給料は月額二五〇円、職員の給料は三〇円前後の時代)

その内訳は、国の補助が三〇万円、県の補助が十五万円、市の財政から十五万円という割合いで供出した。

先に述べた、市長と市会との対立の図式にも思わぬ副産物もあった。

各種事業に対して当然市会の監視は厳重をきわめ、当市の大事業である上水道布設工事には特に目が光り、鉄管検収にまで市の特別の機構を設けて検査を行った。このため、本市の上水道布設工事は、完全無欠とまで言われるような評価を後世得たのである。

村上市長在任中の昭和八年から十三年までのわが国の国情は、昭和八年の国際連盟脱退に始まり、昭和十一年の二・二六事件の勃発

昭和十三年の国家総動員法の発令と、日本はまっしぐらに戦時態勢へと国家目標を整えて行った時代であり、世界情勢も、風雲急を告げる緊迫した中であつた。

村上市長が在任中の主なる行事としては、昭和九年に築港完成を記念して「みなと祭り」が開催された。十年には青年学校と今治商工会議所の設立。そして十一年今治郵便局、広小路本館が建設された。ちなみに、昭和十年度の国勢調査における今治市の人口は、五万一六〇二人である。

時代の激流の滔々とする中であつて、村上市長はその卓抜した政治力と、知名度の高さで政争を次々と克服し、市民の信任も得て再選され、昭和十三年九月までその職にあつたが、任期半ばにおいて、会計上のミスが表面化するに及んで、残念にも職を辞することになる。それをもう少しハッキリ書けば、芸者の花代を市の費用から念出したとの疑惑で、

野党議員の市会での連日の追及に、市政への意欲が失われたものと思われる。

いかにもあつけない村上市政の幕切れだった。市民はその辞任劇に同情し、彼に翻意をうながしたが、彼の意志は固く、自らを枉げることをしなかつた。

郷土が生んだ一代の英傑・村上紋四郎は、それを機に、再び政治の世界には戻つて来なかつた。彼が七十三才の初秋九月の出来ごとである。

## 4

最後になつたが、村上一族の華麗なる政治系譜を記しておく。

村上紋四郎の長男・常太郎は、最高検察庁の次長検事にまで栄進した俊秀である。

その長男である孝太郎は、大蔵省事務次官を勤めたあと、参議院議員として国政に参画



したが、昭和四十六年、五十四歳で急逝した。

次男・信二郎は昭和四十二年衆議院議員に当選のあと、大蔵・内閣・決算の各委員を歴任したが、昭和四十七年、まるで兄の死を追うかのように、五十三歳の生涯を終えた。

当時は「父子鷹」ならぬ「兄弟鷹」として活躍した。将来の日本政治の中で、枢要なる位置を占めることを確約されていた人材だっただけに、その死は多くの人から悼まれた。

それらの人を代表して、後の内閣総理大臣・三木武夫は、次のような追悼の言葉を寄せた。

「村上信二郎君の死は、まことに悲劇的であった。彼が最も敬愛した兄・孝太郎参議院議員の急逝後、一年を経ずして後を慕うかのようにこの世を去った。

兄弟そろって国政に参画し、国家民族のために相たずさえて働こうという矢先のこの計

報は、私の長い政治生活の中でも衝撃的で最も悲しい出来ごとであった。

村上水軍一族の血を継ぐだけあって、村上君の性格は豪毅であった。一度こうと決めたらあとに引かぬ強い信念の持ち主であった。また、愛郷の念はひとしお強く、離島振興に、道路、玉川ダム建設に、そして瀬戸内海大橋の着工問題に休むことなく日夜奔走した。同じ四国出身として、私も幾度か時間を忘れて村上君の意見に耳を傾けたこともあった。

押しの強さと粘り強さは格別であった。大審院検事を父にもった村上君の正義感と鋭敏な頭脳に私はいつも関心していたものだ。志半ばで倒れた兄弟の無念さは察するに余りある。村上君の冥福を祈ってやまない。」

その信二郎の長男である誠一郎氏は、現在、自民党の代議士であり、大蔵政務次官を経験するなど、自民党の若きホープとして、

その将来を嘱望されている。

このように華麗かつ悲劇的系譜を持ちながら、政治眷族として、村上一族の血流は脈々と続いている。

今治市は言うに及ばず、越智郡全域にわたって、村上家四代による政治的恩恵を多く受けている。

おりしも、今年には村上紋四郎の五十回忌に当たる年である。この一月に彼の生家のある宮窪で、誠一郎氏の手によって盛大なる法要が営まれ、その功績の偉大さが、改めて参列者の心に刻まれた。

村上紋四郎は宮窪町が生んだ不世出の大政治家であり、今治市民が永久にその功績と遺徳を偲ばねばならぬ人物である。

昭和三十六年、上水道一次拡張計画が完成したとき、その功労者として村上紋四郎の銅像を山方町、海禅寺山の配水池に建立した。威風堂々の立像で、四阪島製錬所で造られた

ものである。

右手にステッキを持ち、左手をポケットに入れたポーズで立ち、今治の確かな発展と将来への飛躍を確信するが如き双眸をして、遠か宮窪の方向に視線を向けている。その今治市第四代市長・村上紋四郎の期待を裏切ることなく、我々は郷土今治の発展のために目汗しなくてはならぬのである！。



衆議院議員 村上誠一郎氏

### 阿部克行(あべ かつゆき)

昭和十八年生まれ。  
昭和六十二年より文筆活動に入る。  
市民芸誌「どんどび」代表者。愛媛県生涯学習推進講師。  
主な著書「首倡功」「迷宮の刃」「今治郷土人物伝」

### ・参考文献

新今治市誌「歴代市長と市政」  
高須賀康生著「愛媛の政治家」  
中川舜吉著「今治市議会五十年誌」  
今治史談会「今治小誌」  
村上信二郎回想録「先憂後楽」  
森光繁著「今治市制五十年の思い出」  
今治南高等学校創立五十周年記念誌

発行日 平成六年八月一日

「今治手帳」掲載